

# 清明節の儀礼の実践から見た人と人の繋がり方

## 中国四川省成都市郊外のS村X宗族を事例に

星野 麗子（総合研究大学院大学）

本発表の目的は、中国四川省成都市郊外の村落での年中行事、「清明節」での儀礼に着目し、村落社会内部における人々の儀礼の実践の内容を考察することである。一見無関係に見える人が集まり、儀礼に参加し、一連の儀礼過程を経ることが、地理的距離を有する同姓にアイデンティティを喚起する動因にもなっていることを明示する。

清明節は、毎年旧暦3月に行われる祖先を祀る儀礼であり、近年は革命に命を落とした烈士の記念碑に花輪をささげる政治的行事としても知られている。他方で、村社会における祖先祭祀の活動は、「宗族」と呼ばれる父系出自集団を中心とした組織によって営まれる中国漢族社会の特徴でもある。

供養の対象となる調査地の祖先は、移動を経て宗族を切り開いた重要な人物や、年配者と直接的関係を持っていた先祖などである。祖先祭祀の儀礼内容は主に、男性を中心とする成員によって担われ、墓の周辺の雑草を抜いて綺麗に掃除することから始まる。線香や蠟燭を点し、紙幣を燃やしながら、鶏や酒、豚肉の塊の一部などを祖先に捧げて折り、爆竹を鳴らしてその場の祖先祭祀の儀礼は一時終了する。そして次の墓地へと向かい、同じ行為を繰り返す。これら一連の儀礼プロセスは、リネージを共有する宗族内部で行われることが一般的であるが、発表者が調査を行った四川省成都市郊外のS村X宗族では、宗族内部で行われる儀礼の他、外部の人を招聘した大規模な儀礼も見られた。この外部の人と共有する儀礼では、昼食時に祠堂（祖先を祀った建物）の前で、外部から招聘した音楽隊による演奏や、X宗族のシンボルたる龍舞が行われたりするなど、盛大に催されていた。この盛大な儀礼の様子こそが、X宗族の正当性を社会的に裏付ける根拠にもなっている。

このような拡大化された儀礼が展開される社会的背景には、近年の観光開発が大きく影響していることが考えられる。調査地は、中国の西部に位置し、漢族のサブエスニック・グループ（sub-ethnic group）である客家が居住する場所としても注目されている。S村を管轄する鎮政府レベルでは、地方政府主導の下、近年「西部客家第一鎮」と名づけられ、客家をテーマとした観光開発が展開されている。客家と関連する同郷会館や舞台、博物館などは、客家の正当性を付与する物的証拠となっており、同時に、観光場所では企業家や経営者、知識人などが参与し、多様な人々が集まる場所にもなっている。その中で、研究者や知識人は、

S村X宗族を客家の典型的な宗族集団として注目し、メディアも介入して、X宗族は広く紹介されている。

発表者は、2016年9月から2018年7月まで、住み込みと通いを併用した長期フィールド調査を行い、S村X宗族の清明節の二つの儀礼に着目してきた。「宗族の結集は、東南中国や華南ほど顕著ではない」[簫2000:9]と記述されるように、宗族研究は主として、東南中国や華南地域において注目されてきた[フリードマン1987、瀬川1991、川口2013等]。

興味深いのは、調査地のS村X宗族の儀礼に参加する外部の人にとって、拡大された儀礼は、同じX宗族の姓との繋がりを強調する動因にもなっていることである。発表者のインフォーマントは、「同じX宗族の姓であれば、誰でも参加できる」と語っていた。即ち、同じ姓を有する人であれば、他の地域に居住する人も、参加可能な資格を有しているという、ゆるやかながら、繋がることのできる資格を、他者に対して、合理的に説明することができるのである。発表者は、ここに彼らなりの秩序が内在していることに着目したい。

本発表の最大の特徴は、宗族組織から儀礼を見るのではなく、人々の儀礼の実践に主軸を移すことで、宗族が固定した存在ではなく、現実社会の中で状況に応じて創られていく可能性を提示することにある。中国における儀礼の実践の可能性を、宗族という通時的、共時的関係性の中で可視化を目指したい。

### 【参考文献】

川口幸大

2013 『東南中国における伝統のポリティクス——珠江デルタ村落社会の死者儀礼・神祇祭祀・宗族組織』風響社。

簫 紅燕

2000 『中国四川農村の家族と婚姻——長江上流域の文化人類学的研究』慶友社。

瀬川昌久

1991 『中国人の村落と宗族——香港新界農村の社会人類学的研究』弘文堂。

フリードマン、モーリス

1987 『中国の宗族と社会』田村克己・瀬川昌久訳、弘文堂。

キーワード 中国四川省、清明節、儀礼、実践、宗族